

## 卷頭言

由良 薫 (Kaoru YURA)

地球の鼓動を聴く神秘の世界、『洞窟』。そこへ足を踏み入れ、魅力に取りつかれた者が集まって、その素晴らしさをより多くの人に知ってもらい、良好な環境を整備して後世に伝えようと 2008 年 9 月、NPO 法人「洞窟環境 NET 学会」を立ち上げた。本紀要は、会員たちがその熱い思いを綴った第一回の報告書である。

洞窟学の専門家から工学、医学、植物学の学究をはじめジャーナリスト、コンピュータープログラマーなど多彩な顔ぶれをそろえる学会だが、牽引役は会長の澤勲氏である。大阪経済法科大学教授として専門の情報科学論を教えるかたわら、2002 年から洞窟学の講座を開き、受講学生は 4000 人を超える。また、世界各地の洞窟を調査、収集した資料を整理して 2004 年に自宅に「ミニ洞窟」を作ったのを皮切りに、2007 年には「さわ洞窟ハウス」を、そして 2009 年 6 月には集大成として「洞窟情報サロン」を完成させた。洞窟の写真や標本、模型など 1000 点を展示、一般に開放している。こうした取り組みは多くの新聞、テレビでも紹介され、子どもたちが集団で見学に訪れるなど洞窟の魅力を発信する拠点となっている。

この活動をより広く深く普及させるべく発足させた上記「洞窟環境 NET 学会」の設立趣意書は「この法人は地球環境や自然科学に関心を持つ一般市民に対して、わが国の洞窟の現状をインターネットを通して広く告知するとともに洞窟の保全整備に関する事業を行うことにより、環境問題への意識を高め、自然科学の発展・促進に寄与することを目的とする」とうたっている。これを踏まえて本紀要には〈洞窟と観光と環境問題〉をテーマに「洞窟鉱物と洞窟環境」(鹿島愛彦) など 4 編、〈人工洞窟と洞窟模型製作〉をテーマに「産業遺構、人工洞窟としての鉱山跡論考」(藤浦淳) など 4 編、および〈環境と観光と NET〉をテーマに 5 件、計 13 件を掲載した。

一口で「洞窟」と言っても、日本国内だけでも 1000 か所を超え、延長 1 キロ以上のものが 73 か所、最長の岩手県岩泉町の安家洞は 23.7 キロに及ぶ。世界に目を向ければ米・ケンタッキー州のマンモスケイブは実際に 563 キロにも達するという。一つ一つが何億年、何 10 億年という時を経て、地球誕生の息吹を今に伝えている。世界の研究者の努力で、少しずつ神秘のベールが剥がされ、近年のインターネットの急速な発達で、洞窟の魅力は広く一般の人たちにも知られるようになった。

とは言え、洞窟はまだまだ“未知の世界”である。ロマンあふれるこの別天地へ分け入って、地球生成の謎に迫り、インターネットを通して多くの同好の士と情報を共有し、より良い洞窟環境を守っていこうとするわたしたちの試みが、これからどんな道のりを辿り、どんな成果をあげていくことができるか。長い目で見守っていただくことをお願いして、創刊号の巻頭のことばの結びとしたい。

---

元産経新聞社編集局次長・大阪経済法科大学客員教授・洞窟環境 NET 学会理事